

Analysis of emotional experiences that produce an urge to drink in alcohol-dependent patients: a comparative study by length of alcohol abstinence

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/44677

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



平成 27年 2月 20日

博士論文審査結果報告書

報告番号

学籍番号 0827022030

氏 名 木原 深雪

論文審査員

主 査(職名) 稲垣 美智子(教授)

副 査(職名) 田淵 紀子(教授)

副 査(職名) 北岡 和代(教授)



論文題名 アルコール依存症者の飲酒欲求につながる感情体験の分析

論文審査結果(論文内容の要旨及び審査結果の要旨: 1000字以内で記入)

【論文内容の要旨】

いったんアルコール依存症になると治癒はなく、断酒し続けることが回復の基本となる。しかし、日常生活のなかで惹起される感情的な問題は飲酒につながりやすく、断酒し続けるためには感情面への対処が重要な課題となる。しかし、この課題に関する研究は十分になされていない。そこで、アルコール依存症者の中でも、断酒をし続けている者の感情体験を明らかにし、その意味を検討し、看護ケアの方向性を探ることを本研究の目的とした。自助組織に通っているアルコール依存症の男性 20 名を対象に、半構造化面接を行った。分析には川喜田二郎の開発による KJ 法を用いた。分析の結果は、断酒期間によって異なっていた。断酒期間 5 年未満の参加者は、自らの病いに気が付きつつも周囲の状況を被害的に感じて孤立を深めており、自助組織の仲間が身近にいても依存症であることを認めたくない気持ちをもっていた。断酒期間 5-10 年未満の参加者になると、酒の無い生活を構築する必要があることに覚悟ができていた。そのため自助組織に通い続け、自己を客観的に見つめながら酒を飲まない生活習慣を形成していた。断酒経験 10-15 年の参加者でさえ、飲酒欲求そのものはなくなり、独りで断酒し続けることは無理であると信じており、断酒を継続するために自己を再建する努力を続けていた。以上のようなアルコール依存症者の感情体験の特徴をふまえ、断酒歴に応じて必要な他者とつながるような支援が看護職には必要であることが示唆された。何よりも、アルコール依存症の当事者に関心を持ち続けることが支援の基盤として考えられた。

【審査結果の要旨】

関係性を築くためには相当の困難を要するアルコール依存症者と 4 年余りの接触を続け、またその間 KJ 法に熟練するための研修を継続し、それらの結果として、アルコール依存症者の感情体験とその意味を明らかにした挑戦的な研究であり、学術的に意義があると評価できる。本研究の成果は、アルコール依存症者に看護ケアの方向性を考える際の新たな知見であり、今後その活用が期待できる。公開審査では、いずれの質問にも適切な応答がなされた。

以上、学位請求者は本論文の論文審査及び最終試験の状況に基づき、博士(保健学)の学位を授与するに値すると評価する。